

優秀賞

『はじめてのスピノザ：自由へのエチカ』

國分功一郎 著、講談社、2020.

尾崎 未華（文学部 哲学科 2年）

突然ですが質問です。

あなたは「今よりもっと自由に生きたい」こんな風に考えたことはありませんか。あなたは空を飛ぶ鳥に対して「何で飛べるんだ、ずるい！」と思ったことはありますか。また、あなたは自分の意志で自由に手足を動かすことはできますか。

17世紀オランダの哲学者であるスピノザは著書『エチカ』において、「人間はどのようにすれば幸せに、自由に生きることができるのか」について考えた哲学者です。「エチカ」というのは「倫理学」（英語：ethics）を意味し、数学の本のように「定義」から始まります。これはスピノザの著書の中でも特に難読書として知られています。「哲学」や「倫理学」と聞くと、答えがないような難しい問題を長々と考える退屈な学問、このようなイメージを抱く人も少なくないでしょう。しかし、哲学や倫理学はあらゆる時代の常識について「なぜ、どうして」と問いを投げかける、私たちの当たり前を揺さぶる学問なのです。とはいえ、『エチカ』をはじめ、その難しさからなかなか手に取りにくいのが哲学書です。ここで紹介する本書は、そのようなとっつきにくい哲学書をスピノザの『エチカ』に焦点を当て、現代における悩みにも応用できる思想をわかりやすく解説しています。では、冒頭に尋ねた問いに対するスピノザの答えを紹介します。

1つ目の空を飛ぶ鳥に対して、私たちは羨ましく思ったとしても妬むことはしないでしょう。なぜなら、私たちは人間と鳥を同等だと思っていないからです。私たちが妬みの感情を抱くのは、同等だと思っている友達が自分より能力があるときや優遇されるときです。妬みや憎しみは悲しみの感情であり、この状態をスピノザは外的原因(妬みの感情)に支配されている状態であると言います。つまりスピノザは悲しみの感情に振り回されないことが大切であり「自由」な状態だと考えました。

2つ目の問いに対し、多くの人が「はい」と答えるでしょう。しかし、スピノザはこの問いに素直に「はい」とは答えないでしょう。なぜなら、人間の手や足はそれぞれ2本、動く方向やスピードには限度があるつまり「その条件に従って」動かしているからです。このようにスピノザはその人に与えられた必然性に上手く従うことつまり課された条件下で能動的に生きることこそが「自由」であると考えました。

あなたが考える「自由」とは何でしょうか。どのような「自由」が幸せに生きることなのでしょう。スピノザは感情に支配されず、与えられたものに逆らわず生きることこそが「自由」に生きることであると考えました。しかし、これはスピノザが人間にもっと自由に生きることができるように提示した答えの1つであり、この答えが必ずしも正解というわけではありません。このような考え方を知って自分自身はどのように考えるかという問いに向き合うことが大切であり、そのきっかけを本書が与えてくれるでしょう。